

雄株混植割合10%におけるヤマブドウ（涼実紫）の受粉特性

1 研究のねらい

ヤマブドウ雄株の混植割合が低いと、十分に受粉できず1顆粒あたりの種子数が減少し、結実重量も少なくなることが知られている。

前報（研究成果速報No.202）では、雄株の混植割合を10%に設定した試験地で、ヤマブドウ県オリジナル品種「涼実紫」の結実重量が確保されていたことを報告した。ここでは、10%に混植割合を低減させた試験地で、受粉が遜色なく行われていたか確認を行った。

2 試験地と方法

混植割合10%に設定した胆沢試験地と滝沢試験地において、各品種ごとにランダムに40顆粒選定し、それぞれ1顆粒重と種子含有数を測定し、混植割合47%の矢巾試験地と比較した。

3 結果

顆粒重の比較は（図1）、平成16年の混植割合47%の矢巾試験地では平均顆粒重は1.2gであったが、混植割合10%の滝沢では1.1~1.2g、混植割合10%の胆沢では0.9~1.2gであった。同様に平成17年も混植割合にかかわらず顆粒重はいずれの品種も約1gを越えていることから、10%でも遜色なく受粉が行われ、混植割合低下により顆粒は小型化しないと考えられた。

種子数の比較は（図2）、平成16年の矢巾試験地の平均種子数は3.3~3.5個であり、滝沢では3.4~3.9個、胆沢では3.0~3.8個と同等であった。平成17年も同様に混植割合にかかわらずいずれの品種も約3個と差は見られず、混植割合10%でも遜色なく受粉されていると考えられた。

4 成果の活用

涼実紫多収性品種では雄株の混植割合が10%でも受粉されていることが確認されたので、雄株涼実紫3号の混植割合の標準を10%以上とする。



ヤマブドウの種子数は最大で4個

（担当 林産利用部 主任専門研究員 泉 憲裕）

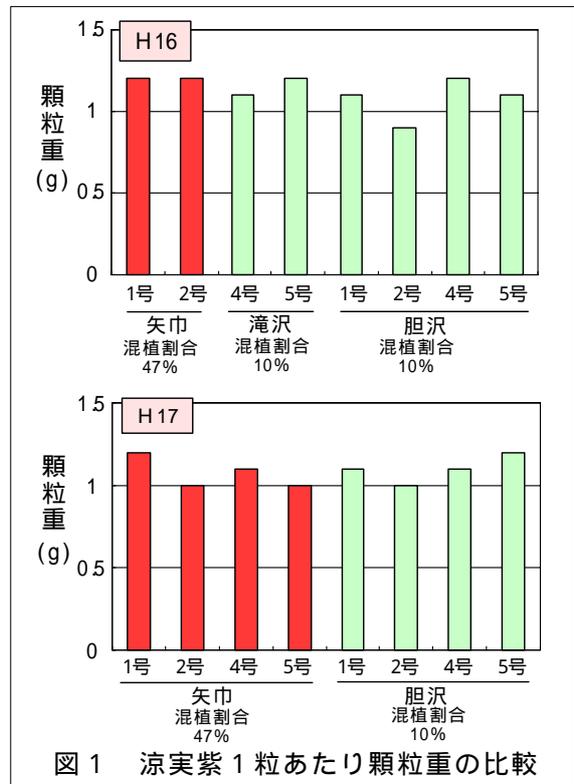


図1 涼実紫1粒あたり顆粒重の比較

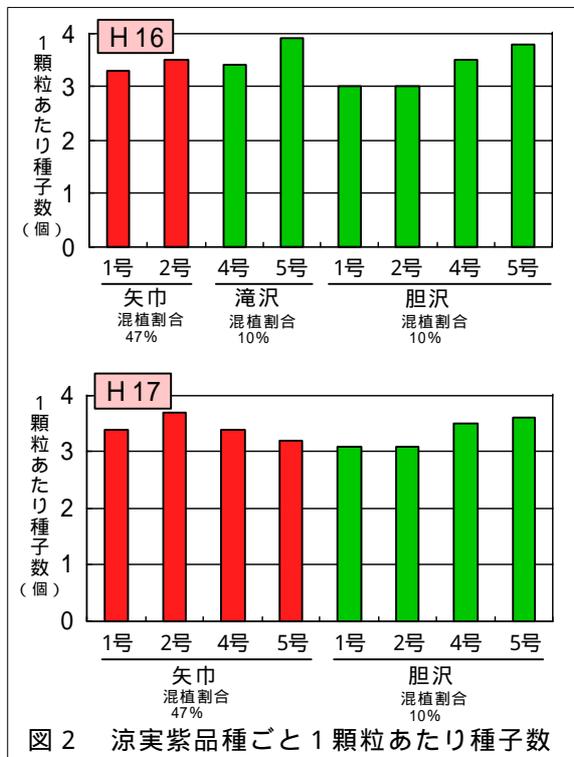


図2 涼実紫品種ごと1顆粒あたり種子数